



竜馬と共に



熱海勘九郎

竜馬と司馬遼太郎

私は二人の男と出会った。坂本竜馬と小説家・司馬遼太郎である。二人とももうこの世に存在していないが、私は本当に出会ったのだ。私の人生で生きる価値を教えてくれた。

「竜馬がゆく」という本の中で。

この「竜馬がゆく」が完成したのは1941年。なぜこんなにも有名に成り得たのか、それは一つの衝撃があったからだと思う。

竜馬という名前

その衝撃とは、「坂本竜馬」という当時知られていないこの青年の存在だ。いや正しく述べるならば、この青年の存在した価値を改めて確認させてくれた司馬遼太郎氏への一種の感動とも言うべきか。

私たちのこの衝撃は後に竜馬という名を日本第一の英雄に押し上げていき、また同時に司馬氏の筆は鳥の眼と呼ばれ斬新な手法として口々に伝えられていくことになる。

再び私は将来の夢について悩んだ。夢が決まらない。こんなんじゃ行動できないのはわかってる。けどどうしても行動できないんだよな。

私は心の中の竜馬に問いかけてみた。

「なんじゃ、まだ悩んでるのかえ？仕方のないやつだな。単刀直入に言うが、おまんは自分が何か凄い人になれると思ってるんじゃないのかえ？それは何じゃ？社長かえ？総理大臣かえ？何だい？

答えられんのか？いいか？勘違いするんじゃないぞ。おまんは確かに可能性ちゅうもんを持ちよる。もしかしたら人の数倍持ちよるかもしれん。だがな、それはただ待ってるだけじゃ花開かねえもんだぜ。行動して行き詰って、

考えてまた行き詰って初めて可能性に挑戦してるってことになるがじゃ。

わしだってそうだ。脱藩して世界を広めよう思っても重罪じゃキニ、家族にも類が及ぶ。何度も悩んだ。

それでもなんでわしが脱藩したか分かるかえ？それはのう。

「信念」がはっきり見えてたからじゃ。日本という国を世直ししたい、変えたいという信念があったからじゃ。

失敗したらどうしよう。その気持ちはわかる。すごくわかる。

しかしなあその恐れを乗り越えた瞬間、わしや新しい世界を見た。黒船だって乗れる気がしたがじゃ。そういうものじゃ人ってもんは。

わかったかえ？よし。じゃあこれで最後じゃ。しかと聞いとくんじゃ

いったん志を抱いたらな、その志に向かって事が進捗するような手段のみをとって、いやしくても弱気を発してはいけねえ。たとえその目的を成就できなくてもその目的への道中で死ぬんだ。

いいな。とにかく進むんじゃ。

色んなことに挑戦するんじゃ。そうすれば道は開けるはずぜよ。

竜馬はふっと消えていった。けどもう大丈夫。
迷ったり失敗するときに人として発展する時だって思えるようになったから。

この「竜馬がゆく」は私にとって運命を変える一冊だ。

何故なら私は夢というものがなかったが、この本をきっかけに夢ができたからだ。
今はその夢に向かって日々勉強しているところだ。

心の中の竜馬が消えかけた瞬間、私は一つ気になっていること聞いてみた。
「あなたがもし今の時代に生きていたらあなたはどんなことをして生きていくの？」

竜馬は何も答えずニコッと笑って消えていった。